

## 雑誌「コギト」 2

—昭和9年の転機を巡って—

中山 渡

### 1

「コギト」創刊以来二年、昭和9年(1934)4月は同人の多くが学窓を去り、例えば田中克己のように郷里大阪に帰り、中学校教師としての新しい生活を始めた時機である。その4月の23号は学生時代の最後を飾る作物にふさわしく、松下武雄の評論「文学と時代」を巻頭に、中島榮次郎の論文はないものの、なかなか充実した、いかにも生新の氣に富む「コギト」らしい翻訳・評論・詩・小説が収められている。その後記は例によって保田与重郎で、彼は「ますます清澄高踏なゆき方をとりたい」とも言い、また「文学人の仕事とは時代の良心を表現することにある」とも述べている。かつて二年前に、その創刊号の後記にマニフェスト代りに書いた「私は『何の為に』『なにを』書くかと、新しい角度から問ふ以前に、つまり文学の効用をいふが、それ以前に『なぜ文学をする』『文学をいじった』、とその生の意識を問はうとする情熱を感じる。」という、政治主義的なプロレタリア文学と文学のアクチュアリティを欠落させる芸術至上主義的なモダニズム文学とを止揚し、清冽な生の意識を追究することで新しい文学の誕生を構想した初心は鮮烈に息づいている。

松下武雄のシェリング「芸術哲学」の翻訳は九回を数えるが、毎回二十枚前後の翻訳には松下らしい真摯な営みが強く感じられ、これは三十二回に及んだが彼の余りに早い死によって13年(1938)、79号で未完のまま終わっている。巻頭の「文学と時代」は、シェリングの芸術発生論を受けて「熱狂とは我が内部に於ける湧き立つ心であり高鳴る感激である」と規定し、芸術の偉大なる創造、形成、発展に働く熱狂について論じながら、新しい文学の成立に言及している。その時、松下は昭和8年以降、この当ても文壇、論壇を賑している。「文芸復興」、あの政治主義的偏向、政治支配からの自由、文芸の復興という潮流に触れて「文芸復興も作家に於ける人間そのものの変革とか新生をおいては無意味である。作家が新しい人間として変貌し新しき生命を獲得することによつてのみ、ここに生命ある文学が生まれる。我々の目指す文学の建設といふのも作家が再び新鮮な熱狂と新しきデーモンを有つことによつてのみ可能であらう。」と主張する。また同時期に論議の華やかだったリアリズム問題、これはソ連の社会主義リアリズムの摂取をめぐる生じた「社会主義リアリズム論争」だけでなく、大正末期から散文芸術論、あるいは散文精神という観点から論じられつづけてきたのであるが、このリアリズムに言及しては「文学的リアリズムと云ふのも文学はその時代の

魂を、真実の相を描き出さねばならぬと云ふ点に尽きる。」と心境小説・私小説をふくめての主観の抑制による現実の観照的、客観的把握のリアリズムを拒否し、かつて保田が「アンチ・デイレットタンチズム」(6号・7年)で解明したりリズム観を想起させる、若き浪漫主義者の生の意識のはげしい噴出を示す文学観を展開している。

また、この松下の論旨は、22号の保田の「文芸復興の意識」に連動するという側面が強い。保田は「由来文芸復興とは、一つの変革であった。過去に対して原理的変革に他ならなかった」とも「文芸復興は人間の復興であつた。」とも断定し、「今日の文学界の意識たるものは精神のはげしさ、芸術のはげしさを求め、一つの規範、末梢的な技法としての「う・ま・さ」を求めはしないと述べ、文芸復興の波によって現れた新人を批判しては「どこにかつて小林多喜二や中野重治がもつてあらはれてきた、あの激しい意志の光と、精神の生きた力の確信があつたであらうか。」と言う。そして、リアリティとは人間やその生活の表相に表れる精細な綾ではなく、その内面に深く内蔵されている事実でなく真実、核なるものであると言う。ここから今日のリアリズムの精神は、文学者の良心の具体的な作用として「何を中心にかへるか」、「ここに集中して作動すべきだと主張する。また、文学復興の潮流がジャーナリスティックな流行現象に転化する側面が露出し、官権によって芸術統制の一端として文芸院設立すら話題となり、昭和6年(1931)満州事変、翌7年の満州国独立及び上海事変、更に8年国際連盟脱退と続く軍部の独走と右翼の実力行使にともなうファシショ化の波が激しくなる日の、青年としての生の意識は「作家のあり方は、いはば社会的な態度につきる。文学は作家の良心である。作家の対社会的又対情勢的な清らかさ以外を信じない。」とし、文学への生の意識を卑俗・俗悪な処世意識の中か

ら取戻す「清らかさ」、文学を純平とした文学に高める作家の「清らかさ」に力点をおいてその文学意識を表白している。

23号に欠稿した中島栄次郎は翌月の24号に「レアリズムは唯一つである」と副題をつけた「サンセリテの問題」を発表している。当時、文学者に限らず広く知識人の間に、満州事変、それに続く大陸の拡大する戦乱を契機とし、マルクス主義など進歩思想への動揺が生じ、自己の革命運動への直接的間接的参加の主体的動機が省察され、それにともなつて国内のみならず国際的なファシズム化という時代相をふくめての社会情勢の一掃結としての「不安」が問題となっていた。哲学者の側からは三木清に「不安の思想とその超克」(改造・8年6月号)の発言があり、加えて、実存主義の立場に立つシエストフの「悲劇の哲学」が9年以降に強烈な影響を与え、知識人の間に思想として、文学として「不安」が大きな課題となったのである。

かかる時代の動向をも視圈に収め、中島は「不安」に、社会の不安、哲学の不安、文学の不安といったものではなく、「人間が政治的歴史的現実を抜きにして生きられない」その「歴史的現実のさなかに投げ出されてゐる不安」があるだけで、この不安は「未来のリアルに対する不安」であり「今日の真実のレアリズム」であると言う。これは、閉塞される時代の生の意識を純一に凝視し、いかに歴史的現実としての現在を生きるかを思索する人間の、現実と自己との落差に生じる自己生成の意識であろう。中島はここまで追い詰められ、既成の文学概念、その手法や完成度を保田同様に拒み、

率直に言はう、美の自律等は理論人の不安な時代の仕事である、私は信じないと。一應はこのことは功利主義とも言はれやう、いとひはしない、私から問はう、美の自律と称したり手法の如何を

論じたりして、その心中何らの苦悶なきか、と。これは理・論・の・問・題でない、今日一般生活人文学人の心・情・の・問・題なのである。

とまで、極言するのである。いかにも大学卒業前後の、青春のただなかにいる青年の口吻と言えるものの、その激情にこもる文学への心熱の真率さ、純一無雑さは疑う余地がない。かかる文学的立場を明確にして、一九二〇年代の後半とは全く様相を異にする一九三〇年代の前半の「今日の歴史的不安」に晒される人間の現実意識を「サンセリテ」という視点から追究していくのである。その時、中島は「感動」とは「自己の肉体の中の他人を発見すること」とした上で、「現実」に正直に『感動』する以外にリアリズムはない」と言い、「感動」によって予想もしない自己を発見することこそリアリズムそのものであると言う。そして、文学界を賑したりリアリズム論にみられる主體的リアリズム、客観的リアリズムをもとに否定し、「現実の真実の前に思はず感動するといふ捨身のリアリズム」のみが真なるものであり、文学に求められるサンセリテはこれを措いてないと、極めて主情的な論旨を展開している。主観の陶醉を批判してきた中島にしては珍しく高揚感に溢れているが、これも時代に強いられた浪漫気質の哲学の徒、詩人の鬱結の心情を示すものであろう。

煩わしいまでに三者の評論を解説してきたが、この論を通底しているのは何であらうか。マルキシズムの十年の近きにわたる激浪がようやく傾き、代ってファシズムの潮流が渦巻きはじめた時代。文芸復興の動向のなかに川端康成、小林秀雄等とともに武田麟太郎、林房雄等が「文学界」（8年10月）を、それこそ呉越同舟で創刊、また舟橋聖一、阿部知二等が主知主義の傾向をもち、後に行動主義の拠点になる「行動」を同時期に、改造社は「文芸」（8年11月）を発刊、一方、日本プロレタリア作家同盟（略称・ナルプ）は解散（9

年3月）、すでに小林多喜二は前年2月に官権によって虐殺という社会的にも文学的にも激動の時代である。この時代に在って、現実と自己との落差が生成する心的情況、そこに湧く鮮烈な生の意識が三者を通底しているのである。

ある者は「時代の魂を、真実の相を」と願い、またの人は「文学は作家の良心……清らかさ」を求める。他の者は「現実の真実の前に思はず感動する」ことを熱く説く。これはいずれも既成の觀念なり概念なり、さらには秩序、価値体系を甘受できない、むしろ拒絶すること人間の変革、新生をわが生の根源に求め、その生の意識に密着して文学を発想しようとする浪漫的な心情である。現状の否定による新現実の構築を模索する情熱にこもる、現状打破への激烈な意思でもある。

過剰に過ぎる自意識という側面を当然のこととして持ちはするが、しかし、知性の微温さに安住できずに感性の主情をつらぬいての知性の透徹さに生きようとする激情は、三者に一樣である。加えて、これらの思索に現れる古典は論理の生新な発条となり、発想の彩りとなっているが、それがゲーテやドイツ・ローマン派であらうと日本の古典であらうと、その発想を支え、思索を時代、現実の表相に浮遊させず、現実の先端にありながら現実の深層にある真実としての時代精神に近接し、浪漫としての現実超脱を構想するその文学観を純平たるものになっている。これは「コギト」創刊号の後記「私らは古典を殻として愛する。それから私らは殻を破る意志を愛する。」という浪漫主義的な古典観が開花しはじめたことを意味しよう。

こうみてくると、創刊から二年、同人らが学窓を去った日の23号とその前後の号は「コギト」という新しい浪漫派の理論的な基盤が

形成され、方向づけられたことを示している。そして鋭い現実意識に裏打ちされた生の意識の噴出する文学が次々と誕生し、生の意識の屈折をその屈折の場で、時に激越、イロニカルに、時に鮮麗、リリックにと思惟的な抒情詩を開示する「コギト」の誌風も樹立されたとみてよい。23号には田中克巳の5連138行からなる長篇詩「西康省」がある。これに逸早く反応して保田は「今日の最も大きい夢がある」(24号・「深淵の意識」と言っているが、当時の支那とその民族への愛をイロニーとして表現するこの作品は、後に「詩集西康省」(13年刊)に収められ、田中の代表作の一つと評価の高い傑作である。また、大阪高校とは無関係ながら、田中を介して15号(8年8月)から参加した4歳年長の伊東静雄はすでに「病院の患者の歌」(15号)、「新世界のキイノ」(16号)、「私は強ひられる」(21号)などを五回にわたって寄稿しているが、この23号には彼の代表作の一つとして高名な「帰郷者」、

自然は限りなく美しく永久に住民は  
貧窮してゐた。

幾度もいくども烈しくくり返し

岩礁にぶちつかつた後に

波がちり散りに泡沫になつて退きながら、

各自ぶつぶつと呟くのを

私は海岸で眺めたことがある。

絶えず此処で私が見た帰郷者たちは

正にその通りであつた。

その不思議に一樣な独言は私に同感的でなく

非常に常識的にきこえた。

(まつたく!いまは故郷に美しいものはない。  
どうして(いまは)だらう!)

美しい故郷は、

それが彼らの実に空しい宿題であることを

無数な古来の詩の讃美が証明する。

曾てこの自然の中で

それと同じく美しく住民が生きたと、

私は信じ得ない。

ただ多くの不平と辛苦の後に

晏如として彼らの皆が、

あそ處で一基となつてゐるのが

私を慰めいくらか幸福にしたのである。

この、後に萩原朔太郎に極地の緯度に近い岩礁ばかりの島「アラ  
ン島の哀歌」(44号・「わがひとに与ふる哀歌」と感嘆させた、小林  
秀雄の「故郷を失つた文学」(8年5月・文芸春秋)とは異質な、深  
刻、鬱結する心情を基底とする故郷喪失への醒めた意識、イロニー  
に溢れる作品を発表している。まさに、理論のみでなく、実作とい  
う作品創造においても、「コギト」は自己定立を確実に果たしたので  
ある。

## 2

ところで、ここまで充溢した「コギト」は23号あたりを契機に初  
めての転機を迎えたようである。その23号の後記には「多数の同人  
は今学窓から発足した。……同人の多数にとつての一つの転機」と  
あり、転機は社会人職業人としての門出を表面的には意味しよう。

しかし、卒業を控えた2、3月ごろには大阪高校の同級生としての友情を基盤に発足した雑誌が、同人の学生生活終了にともなう物理的にも不可抗力による、結果としての、友情、その証としての文学活動の停滞が論じられなかったとは言えない。一方、「コギト」の果敢に築き上げた営為に対する自信から、同級生の友情を広げ、「コギト」に親近感を寄せる外部の人の寄稿も得て、いわば第二次「コギト」とでもいった性格の雑誌が話題とならなかったとも言えまい。つまり、文壇への予備門として叢生し、なんらの精神的文学的な連帯感情も意識ももたない多くの同人雑誌を否定し、保田がかつて提唱した「共同の営為」(7号)という性格を持続しながら、級友的な同人雑誌から同志的というか、同じ心的傾向をいだく、既成なるものに対する自覚的な新しい文学集団としての同人雑誌への発展が語り合われたかもしれない。

24号になると、「二十数号に亘つて踏襲してきた方針を今やいく分変更してどうか、さうした見解が僕らの間にある。」と言う。そして、25号でははっきりと「僕らは過去二十五号を一つの基礎としてしか考へ得ない。二十六号以後に於いてなさるべき仕事もほぼ見当づけられてゐる。」と、新しい方向が予告されている。具体的にはなら示されていないが、外部の寄稿者である日高次郎(野田又夫)の、デカルトについての随想「雑考」がこの号にあり、これが新しい動向の前兆であろうか。

では、大多数の同人の大学卒業、東京や京都からの転出、新生活という転機をどう乗り越えたのだろうか。

26号(9年7月)を手にすると、装丁の一変したのに驚く。地味でそっけなく「コギト」「COGITO」の文字ばかりが表紙に、扉に目についたが、表紙はヘルダーリンの筆跡、「コギト」の文字が上段に

黒地の白抜き、扉も上段にエジプト18王朝の奏楽舞踏装画を置くという清雅な装いに変っている。斬新な装丁は「コギト」の新生を象徴するのであろう。

目次を見ると、保田、田中、中島らの同人にまじって、従前の文学時評や後記にその名が見える中井正一、亀井勝一郎、本庄睦男、大山定一という四人の外部からの寄稿者がいる。由来、「コギト」の執筆者は同人かそれに準ずる仲間、稀に日高次郎のような大阪高校の卒業生が寄稿するだけである。

ところが、京都大学にあって美学研究を続ける深田康算門下の、十歳年長の中井は「リアリズムの問題に寄せて」を、プロレタリア作家同盟の解散後に保田や藤原定、本庄らと9年4月創刊の雑誌「現実」同人となった亀井は、その初篇を発表するとともに小林多喜二、中条(宮本)百合子ら同陣営から否定的な批判を浴びながら完結した林房雄の長篇小説「青年」(9年3月・単行本刊)を論じた「青年」に就いて」を、やはり作家同盟の解散後に「現実」に加わり、後に「石狩川」(13年)を書く本庄は小説「添書」を、ドイツ文学者で、すでにリルケの研究と紹介で定評のある大山はトーマス・マン「魔法の山」の翻訳、これは以後六回続くが、これを寄稿している。寄稿者はいずれも年長で、すでに23号の後記で「僕らの多くの友人はよき友情を与へ、尊敬すべき先輩は好ましい力づけを惜しまなかった」と述べているが、その友人に亀井や本庄、先輩に中井や大山が属しよう。その評論といい小説、翻訳はいずれも充実したもので、中井のリアリズムについての精緻な哲学的考察は、学術雑誌の巻頭にふさわしいアカデミックなものである。しかし、この論文が巻頭に位置し、亀井と並び、さらに保田や中島、三浦常夫の評論と呼応し、いささかの異和感もないところが「コギト」の特色である。

同人にはアカデミックなものへの畏敬があり憧憬があることは、早くからみられる。哲学や社会学を、また文学や史学を専攻する者の多い同人のこと、当然とも言えよう。8号(7年12月)の後記で、ディルタイ「フリードリヒ・ヘルデルリン」の服部正己の翻訳に関連して「真摯な芸術的美学的な匂ひの雑誌として『コギト』を示したい」と保田は述べている。近くは24号に「京都の学風や文化的雰囲気は僕らのコギトの上から東京の文壇に入ってゆくなら」(後記)の言葉もあって、学問的な香気のたゞよう雑誌をという意図は明確で、それを裏うちする同人の仕事はあらためて述べるまでもない。

これがあって、中井正一の精緻な論文も巻頭をかざって異和感なく、「コギト」の転換点となる26号の出版をきわやかにしている。中井や大山定一というアカデミックな世界にしながら安住せず、例えば後のことにはなるが、中井のように「世界文化」(創刊・10年)を新村猛らと刊行するといったアカデミズムに埋没しない知性に、学問に対する情念に「コギト」同人は惹かれたのだろう。後記を含めて誌上の動向から、この傾向は保田に強く、より濃厚にアカデミックにしてアカデミックでない清新な生の意識を絶えず発散する知己を寄稿者に迎え、「コギト」の文学活動に純乎とした学問の香気求めたのであろう。また、亀井や本庄のような、権力からの弾圧によるものの、内部による自壊作用という側面もある日本プロレタリア作家同盟を生き抜き、解散後も現状打破に鋭くその生の意識を向ける文学者の寄稿によって、絶えざる上昇への意志をかきたてようとしたのであろう。

この外部からの寄稿も得て雑誌に活況を与え、自らの文学活動を充実し、斬新な生の意識と豊潤な古典志向によって浪漫的な新文学

を開拓しようとする「コギト」は、28号では仲町貞子、古谷綱武、永瀬清子を迎えるばかりか、蔵原伸二郎を招き、「東洋の満月」の詩六篇を一挙に掲載している。これは実に連載八回、その作品は総数五十五篇に及び、後に詩集「東洋の満月」(14年刊)に収められている。

ところで、高校の同級生を母体とする雑誌の、同人の大学卒業による一転機、それこそしりすばまりになる可能性のある危機を、外部の「近しい精神」(28号後記)の先輩、友人と同人との、それこそ「協同の営為」で克服したのである。そして、更に、同人雑誌としてはあまり類をみない「特集号」という方針まで打ち出し、「コギト」は同人雑誌の枠を越えて、昭和前期における浪漫主義文学の開花に大きく参与、むしろ中軸となっていくのである。

30号(9年11月)は170ページにわたって「独逸浪漫派特集」を組んでいる。外部から、大阪高校の恩師、ドイツ文学者興地実英、先輩の哲学者野田又夫(筆名日高次郎)のほか大山定一・神保光太郎・芳賀檀・亀井勝一郎ら、主としてドイツ文学専攻者ら七名を招き、同人はドイツ文学関係、あるいは哲学関係六名が執筆している。

この特集ではドイツローマン派それ自体を対象に四篇、次はシュレーゲル兄弟の弟、フリードリッヒ・シュレーゲルに三篇、ヘルダーリンとクライスの各二篇が、これに次いでいる。後記で保田は「シュレーゲルやヘルデルリンは、僕らが無理を通すまで、少なくとも新しい十人の関心者はなかったであらう。」と自負しているが、これらドイツローマン派を学問の枠に固定せず、文学として広く紹介し研究してきたのは「コギト」の大きな功績である。服部正己のディルタイ「フリードリヒ・ヘルデルリン」の翻訳はもとより、他誌への発表ではあるが保田の「清らかな詩人」(雑誌文学界・9年2

月)など、当時、極めて斬新なものであったことをかつて田中克己氏は直に語ってくれたが、十分納得のいく好論文である。この特集でも、ヘルダーリンについて中島栄次郎、日高がともに論究している。

フリードリッヒでは、その女性や文学観が論述されている。彼の自伝小説「ルツインデ」(1796)を薄井敏夫が15号から20号まで六回にわたって「ルツインデ」の名で翻訳しているが、これに基づいて保田は「ルツインデの反抗と僕のなかの群衆」を書いていく。時代の不安を敏感に感受し、危機意識を濃厚にもって発想するのは保田の発時からの姿勢であるが、ここでも「イロニー」が多彩に現れて表現の晦渋と難解はついてまわるものの、危機意識、彼の問おうとする生の意識は、鮮明である。保田は、矛盾にみちた自我を凝視し、自己の下らなさの自覚から「ルツインデ」は生まれたとし、詩人芸術家は奈落の人としての自身の姿を暴露しつくす必要があると言う。そして、

芸術は汚れた時代の美しさであり、失意の時代、自由精神の高踏の歌である。……最も高邁なもの、最も美しいもの、最も正しいもの、それらの虐げられた泥濘の日に涙を流す詩人の手にのみ、美の守護は寄托せられてきた。

と主張する。また、浪漫主義者は現実生活が「文学すると共に文学化されねばならぬ」と文学する心情、情緒の根源にさかのぼり「由来浪漫派は世界で友情以外に信じてゐない。語られた言葉よりも、お互いに語る言葉を信じた。共に詩作し、共に営為する、彼らの結合は非常に血縁的でさへあった。」とも述べ、「浪漫派」としての「コギト」の熱い友情、反時代的な結束を語り、訴えているかのようである。

ともあれ、この特集は後記に「独逸浪漫派の冷静な知識など僕らは考へてゐない。図式的文芸学など偽りだと思つてゐる。……ただ近世の芸術の最初の自覚者たちの気持に立ちもどることに、今日至上の任務を考へてゐる。」とあるように、純粹なるアカデミズムと詩精神との結合による浪漫主義文学の新風を、日本の土壤に芽生えさせようとしたもので、同人雑誌としては類を見ないものである。

続いての31号も特集で、発足時から詩人氣質を濃厚に雑誌に反映し、田中をはじめ同人の多くが詩作し、伊東静雄を同人並みの仲間に加えた「コギト」らしく「詩特集」である。同人から田中、三浦、それに伊東、外部からは詩集「山羊の歌」刊行寸前の中原中也、詩集「第百階級」(昭和3年刊)で樹立した詩風に変化を見せはじめた草野心平、北川冬彦の「麵包」に在って鮮烈な生の意識の表現で注目を集めはじめ、27号に「雪崩」を寄稿している神保光太郎、すでに保田の依頼で28号から「東洋の満月」一連の作品を寄稿している蔵原伸二郎のほか、山村酉之助、牛窪清衛である。中原の「わが喫煙」だけが「白痴群」(6号・5年4月)に発表し、詩集に「少年時」の詩篇の一つに収める旧作であるほかは、いずれも新しい作品である。草野の「に就いて」は後に詩集「母岩」(11年9月刊)に収められているが、たぎる激情、人間的な憤怒が清新な宇宙感覚と渾一している作品である。また、神保の「龍吉の歌」、これも後に詩集「雪崩」(14年刊)に収められるが、作品「雪崩」にみせた現実の鋭い切り口はここにもみごとにあって、永遠なるものへの思念にたゆたう土俗的香気は、この特集に生彩を放っている。このように外部の寄稿も充実したものであるが、同人の田中は「雲に鳥 詩五篇」を載せ、その「鳥・朝・湖尻・蛇つかひ・首途」は後にいずれも「詩集西康省」に収める作品群である。特集号の巻頭を飾る「鳥」を引用

してみよう。

おれは塵芥とともに川を下る

一つの島に上陸し

夕焼や暁のいろを見て

高い石段を登ると

海も陸もかぎりなく広がった。

着想の面白さ、含む諧謔に特徴のある「朝」といい、現実への反抗の意志を含意する、情景の清新な「首途」といい、この五篇には田中らしい滋味がある。この「鳥」の主調音は「首途」の含意する現実への反抗であり、現実からの離脱の意志である。「塵芥とともに」に田中の痼性は激しく露出し、最終行において現実離脱、現実なる穢土からの遁世が意思され、現実から強いられる詩人の鬱屈の情が沈痛な黙考をともなうて端然と表現されている。いかにも田中らしい、「多島海」(33号)にいたる前の詩風を語る作品である。

また、伊東は前号の、後に彼の代表作、昭和詩の最高峰の一つとも目される「わがひとに与ふる哀歌」、その連作のような「冷たい場所」を発表している。

私が愛し

そのために私につらいひとに

太陽が幸福にする

未知の野の彼方を信ぜしめよ

そして

真白い花を私の憩ひに咲かしめよ

昔のひとの堪へ難く

望郷の歌であゆみすぎた

荒々しい冷たいこの岩石の

場所にこそ

これまた伊東の絶唱の一つで、荒涼そのものの場所に孤寂な安息——浄福を求めるといふこの作品の魅力は、生と死がせめぎあい、その緊張関係をゆるめることなく持続して共存しているところにある。このイロニカルな発想は「コギト」の詩風を端的に示すものである。萩原朔太郎の言う「痛手を持った美しさ」(44号)、その冷酷な生の意識の抒情にこもる沈痛は伊東だけでなく、「コギト」のエコールとしての特質である。

これらの詩篇のあとに、保田の「二人の詩人——田中克己への手紙」がある。「二人」とは伊東と田中を意味するが、特に伊東の「僕の心を抱擁してくれる美しい魂の歌」を賞揚し、田中の「古い詩」——たぶん「支那」(2号)「天上有事」(3号)のような痼性の炸裂する作品、「昼」(6号)「春旅」(12号)のような洗練された、神経のはりつめて繊細な作品であろうが、これを高く評価しつつ、田中の現状に不満を呈している。そして詩壇をも賑わしたモンタージュ論、おそらく神原泰や半谷三郎らに代表される詩の方法論としてのそれであろうが、ここにみられる詩の「卑俗低調」を嘆き、「本当の文学ならば、一つの草花を描いて、この時代、この人、この国、この精神を発現させるものであらう。」と、詩心の高揚を訴えている。

昭和初期の抒情詩の主流となる「四季」は、堀辰雄ひとりの手をはなれ、堀・三好達治・丸山薫の三人の手で第二次「四季」の刊行(9年10月)を見ている。その翌年には逸見猶吉・草野心平・高橋新



吉らによる「歷程」、北園克衛ら純粋なモダニストによる「VOU」の創刊されるという一九三〇年代後半の詩的動向にあって、この特集は濃厚な生の意識に根ざす激烈にして高雅な詩風による「コギト」の自己定立をも意図していよう。ともあれ、このように「コギト」は転機をバネに、「特集」という方法によっても内なる同人と外なる先輩・友人との連携による「協同の営為」をますます強化している。そして、創刊時から持続する、文学を、その効用主義、たとい社会のため、芸術のためであろうと、その実用主義から解放し、生の意識を問い、古典志向を深めつつ、文学を、根源としての生の内部に位置させようとする唯心的ともいえる個我意識の濃厚な文学運動を展開していくのである。

### 3

ところが、思いがけない事件が生じた。それは「独逸浪漫派特集」(30号)巻末に掲載された『日本浪漫派』広告を巡ってである。これは雑誌「日本浪漫派」の創刊(10年3月)される前月の33号まで掲載されたもので、

平俗低徊の文学が流行してゐる。日常微温の饒舌は不易の信条を昏迷せんとした。僕ら茲に日本浪漫派を創めるもの、一つは流行への挑戦である。

僕らは専ら作家の清虚俊邁の心情を尊び、芸術人の不羈高踏の精神を愛する。……

にはじまるこの「広告」は、「流行への挑戦」とあるようにプロレタリア系と芸術派系との文学、すなわち、時代の主流としてリアリズムに文学観の機軸をおく当代の文学を「平俗低徊の文学」と規定し、「現状反抗を強ひられた者の集ひ」として「日本浪漫派」を結成し、

「卑近に対する高邁」、「流行に対する不易」を掲げ、「青春の歌の高き調べ」を求めると主張するのである。この主張は「コギト」にみられる文学意識と軌を一にするものである。表現に古風な措辞、古色の語彙、晦渋な叙法の目立つ保田の執筆であつてみれば当然で、反時代的な姿勢の濃い宣言で、詩人の神保光太郎、評論家の亀井勝一郎・中島栄次郎、小説家の中谷孝雄・緒方隆士の六名が連名して発表したものである。

「コギト」から保田と中島の二人が参加して結成された「日本浪漫派」は、他の同人の関知するところではなかったらしい。東京と大阪が多いとはいえ、各地に散在、「広告」を読んだの反応も明らかでない。しかし、例えば、田中克己は復刻版「コギト」の解説で、素っ気なく「わたしは伊東静雄から『保田さんは役人と教師は入れない』といっているそうですよ」と聞いて、もとより加入しなかった。」と書くが、この文脈には「もとより」の語気を含む、「広告」発表から四十年たつても消えない反発、苛立ちの口調が感得できる。やはり教師である伊東は、「日本浪漫派」の2号(10年4月)に「真昼の休息」を発表、同人になつていたのであるから、同じ大阪に住む田中の心中は想像できる。また雑誌「文芸広場」での杉山平一氏との対談(59年10月号)で、杉山の誤解に基づく『日本浪漫派』は戦争に傾き「コギト」は……の問いに「そのとおり」と答えるあたりにも、田中の心理の陰影がみられよう。しかし、それも単なる憶測、「コギト」発刊のほとんどの費用をみている肥下恒夫の心中など想像したくても手懸りが無い。衝撃の結果とはもとより言えないものの、田中は「四季」の同人に11年2月から参加、14、15年からは「文芸文化」の蓮田善明と深交を結んでいる。といって、田中は発表の比重を「四季」にかけていくのではない。同人たちの「日本浪漫派」

結成に関する反応は、この程度しか判明しないものの、波紋のあったことは十分に想像できる。

ところが、「広告」に対する外部からの反応はすさまじいものがあったのである。保田によると非難だけでも数十名に及び、新聞・雑誌をにぎわし、雑誌刊行の前に「コギト」に「後退する意識過剰——「日本浪漫派」について」(32号・10年1月)を書かざるを得ないほどの否定的反響をよんだのである。

最も強烈な反発は高見順である。戦争後の日記(21年4月28日)でも、また「昭和文学盛衰史」(40年刊)においても保田の独創性とその文学精神を評価する高見ではあるが、「浪漫的精神と浪漫的動向」(文化集団・9年12月)を発表している。この一文は、「現代文学論争史 中巻」(未来社)によると、「『日本浪漫派』は多少とも筆者が期待してゐたやうなプロレタリア文学内における浪漫的動向の結果には非ずして、具体的に言へばその動向の『コギト』的自由主義的浪漫主義への陥没」と捉え、林房雄や亀井勝一郎の「降伏」という状態で結成され、「広告」発表となった「日本浪漫派」への反発である。「頭ばかり先に出し足が地を離れる」と、現実超脱の姿勢が招く側面を突いては、「現実と闘ふリアリスト」の自負から批判をゆるめない。そして、「浪漫的精神の本質たる反抗的精神」がないとし、「日本浪漫派」の蔑む「糞リアリズム」にこそ真の浪漫的精神——硝煙はただよい、軍人と右翼によるファッショ化、都市に失業者、農村は荒廃、この「暗澹たる現実と格闘する」浪漫精神があると反発するのである。これは高見ひとりではなく、プロレタリア系の人々、あるいは三木清のような知識人に共通してみられる傾向で、これは後の「人民文庫・日本浪漫派討論会」(報知新聞・12年6月)に発展するのである。

雑誌の創刊以前、単なる「広告」なのに予想外の反発に応えて、保田は前述の「後退する意識過剰——「日本浪漫派」について」を発表している。保田は改めて「日本浪漫派」のいづく文学観を開陳し、批判に反論している。高見に対する直接的な反論のないのは不思議であるが、「今日の日本を考へねばならぬ。流行は暗澹さを描いたのではない。暗澹さの暗さに甘えた姿である。進歩的思想を描いたものでもない。進歩的思想に甘えたのである。」とあるのは、高見をも念頭においてのことだろう。保田は時代の不安も懷疑も現代文学から後退し、「最近流行するリアリズムとは、仮設の現実に作家の我を忘れた放蕩であらう」と極めつけるのである。

保田と高見に限定しても、互いに鮮烈にいだく現実意識には、天と地ほどの隔たりがある。資質の違い、また保田の詩人氣質と高見の作家氣質の衝突という側面もあって、その文学観は交叉しても、また限りなく離れるのである。ともあれ、四面楚歌の状況で「日本浪漫派」の「広告」は掲載され、雑誌は10年3月に創刊されるのである。しかし、雑誌は意外に短命で、二十九冊を出して13年8月に終刊となっている。ただここに結集した人々が昭和十年代の浪漫主義文学に欠かせない文学者であったので、誌名から離れて、保田与重郎を中心とする一群の人々を「日本浪漫派」と今日では、呼称するが、雑誌としての「日本浪漫派」と並列させ、等価に見なすのは誤りである。

さて、この「広告」の載った30号、さらに「広告」への反論に対する「後退する意識過剰」の載る32号あたりから後を通してみられることは、従前に増して、保田の方針によって編集が固められていることである。後記もほとんど毎号保田が書き、彼は一回として評論なり、小説、詩歌の類を発表しないことはない。同時に二、三篇

ということさえある。これらは同人中彼一人で、対外的にも「新潮」・「セルパン」はじめ「文学界」等の雑誌に手広く寄稿している忙しさのなか、「コギト」に賭ける情熱が感得できる。その後記・雑記・時評をも含め、彼の評論が「コギト」を先導し、また彼が中心となつて外部からの寄稿者が選ばれてもいるようである。また、同人の多くに関係のない「日本浪漫派広告」を四回にわたつて載せた上、それに関連する「後退する意識過剰」の論文も掲載する、これは発行人の肥下とのみの相談らしい。それを裏づける発言が前記の田中の対談にもある。かくして、実質的には保田が主宰となり、「広告」を巡る外圧と内部の動揺を乗り越えて、「コギト」は雑誌「日本浪漫派」とパラレルな関係で昭和10年代前半の文学界に大きな活躍をするのである。

ところが、この「広告」を巡つての保田の対応の間に、その文体に空疎な、情緒の密度を欠くものが時として現れてきたのである。予想もしない広範な反発は、彼を苛立たせ、「やぼん・まるち」（創刊号）に示した、ひたすら美の世界に生きる人間のデモニーニッシュな生の意識を希薄にしたのだろうか。「後退する意識過剰」には、例えば、過剰なまでの時代の不安、懷疑、また危機意識は後退し、それは文学者たちの意識のしきみにのぼらないとして、次のように述べる一節がある。

不安などどこにあるか、ことにつけ何かのニュースにつけ、ほつとしてゐる君たちの楽屋を僕はとみに最近よく知つてゐる。／隣近所のお話を刻明に描いてをれば、人も我も一応日本の文学界の気分の中で安じてゐられる。

このような叙述が時々あつて、保田の「自由精神の高踏の歌」という文学への心情がその彩りを消す。四面楚歌、ポレミックな姿勢で

イロニカルな筆法にならざるを得ないが、かつてなく粗雑である。これが「日本浪漫派」（3号・10年5月）に発表する「反進歩主義文学論」の一節、例えば、プロレタリア派からの革命的ロマンティズム待望論に反論したものであるが、「僕らを論じ、未だ左翼か右翼かわからぬことが気がかりだといった。しばらく静観して論じよう」と広告した。……君らの微温的な態度が是なら、僕らは非であり、僕らの態度はなら君ら非である。君らのさういふ温情な態度を、文学の左翼的指導者の醜悪といふ。」にもみられる。

かつて保田は「コギト」創刊以来、否定の対象としたプロレタリア文学の最後の拠点だった「日本プロレタリア作家同盟」の解散を聞いて、官権の弾圧と内部の相剋という不利な情勢にあつてもそれを支えた人々を、立場を離れて「立派である」と賛嘆し「かういふ結果になるから始めからやらねばよいのだ、とかその結果を見よと、高くとまつて嗤笑してみたい人々など決して、立派な精神の持主でないやうに思ふ。少くとも文学の徒はかうしたものであつてはならぬやうだ。」（23号・文学のリアリズムに関連して）という柔軟な目を欠いて、いささか姿勢を硬直させている。それだけ、「広告」に対する反発の強さは、保田を大上段に構えさせ、その攻撃的態度は彼の感受性のみならず高踏的にして鮮烈な文学への心情を、時として薄め、それを顧みさせないものがあつたのである。

しかし、これも一過的なもの、保田も他の同人たちも己が道を歩き、杉浦正一郎は俳諧研究者にふさわしい研究論文「芭蕉と宗因との関係について」（32号）等を、伊東静雄や田中克己は昂揚する抒情の詩作を次々発表している。また、外部の寄稿者には緒方隆士をはじめ「日本浪漫派」の創刊同人のほか二次の同人たちも加わるものの、「日本浪漫派広告」を巡る影響は全く見られない。その上「コギ

(1935) には遂げたのである。

ト」の後半を飾る有力な詩人小高根二郎も37号(10年6月)から登場し、保田与重郎は「有羞の詩」を39号に発表して、すぐれた資質の開花を示すのである。この文学史論であるとともに現代詩論でもある卓越した評論は、一九三〇年を挟む十年間の「市民的民衆文学」が「浪漫詩と象徴詩の伝統を僕らの青年から掠奪した」という問題意識から構想されたものである。「有羞」とは保田の造語で女性的な「含羞」に對置してよいもので、家森長治郎氏が説くように「いくらかのはじらいを帯びながらも身につまった(鬱結)のなげきや憤りが表に現れるさま」(昭和詩論の研究・日本学術振興会刊)と言つてよく、慟哭にいたる前の、外に発散させない鬱屈の心の自然な表出を意味しよう。保田はこの評論で、与謝野鉄幹に焦点をあてながら北村透谷にはじまる浪漫主義の系譜を明らかにし、実利偏重、利益社会としての近代市民社会における文学の歴史を描き、近代における浪漫主義文学の開示する世界、その精神を鮮明にしたのである。その時、与謝野晶子「君死に給ふこと勿れ」に触れ、大塚楠緒子の「お百度詣で」に及んで、これらを「有情有羞の声」と言い、大町桂月の晶子批判に対しては「詩はときに裏長屋の賤婦愚民の駄々児口調かもしれない」と、詩の、文学の浪漫を、条理でなく情理を尽くして論述するのである。これによって耽美的なまでに屈折しては時代の真実に迫り、道の在処<sup>ありか</sup>を探る保田与重郎の文学史観が初めてみごとに結晶し、また、その詩観、文学観が彼の感受性のままに開示されていて、「コギト」掲載のおびただしい作品群のうち、「戴冠詩人の御一人者」(50号)、「饗宴の芸術と雑遊の芸術」(69号)などとともに保田与重郎の代表作と言つてよい。「日本浪漫派」に対する激しい反発を受けとめる保田、また同人も昭和9年の二度の転機を克服し、保田、田中、伊東らは文学者としての自己定立を昭和10年